

卒業論文の要旨

論文題目	子宮頸がんワクチンの新聞報道は役に立ったか
氏名	大山恵美
メジャー	メディア
(要旨)	
<p>この論文では新聞報道に視点を置き、中学生や高校生の少女たちに子宮頸がん予防ワクチン接種が必要なのか、不要なのか、判断できる報道をしているのか検証した。</p> <p>子宮頸がんはヒトパピローマウイルスによって引き起こされる。日本で承認された 2 つの予防ワクチンは、発がん性のある高リスクの HPV の感染を予防することができる。</p> <p>厚生労働省は、子宮頸癌等ワクチン接種緊急促進事業を行い、接種の勧奨をした。ワクチンを任意接種から定期接種にもしたが、副作用の報告を受け、積極的な勧奨を中止することになった。</p> <p>人々は、初めは無料で受けられる子宮頸がんワクチンの接種を受けた。しかし、副作用の報道が出ると、接種率が低下する。</p> <p>新聞の報道は、各都道府県や自治体がワクチンの助成を開始したなど、初めはワクチン接種について肯定的な報道をしていた。しかし、副作用について報道してからは逆転して否定的な報道をした。だが、はっきりとワクチン接種について賛成や反対ということは出していない。</p> <p>現在も行政は、副作用問題があるため積極的な勧奨はしていないが、対象者は無料で接種することができる。接種は個人の判断に任せている。新聞報道は、接種の判断に役に立つ記事は出していない。</p> <p>過去の新聞報道を見ると、副作用の報道が出る前と出た後の報道が明らかに異なり、子宮頸がん予防ワクチンが必要なかどうかわからない。また、各新聞社の考えとして出す社説を副作用報道が出てから出し、最終的に「検診が重要」と接種の必要性についての判断から逃げている。これらのことから、現時点では「子宮頸がんワクチンの新聞報道は役に立っていない」と考える。</p>	
(指導教員の推薦のコメント)	
<p>子宮頸がんワクチンに関する新聞報道という今日的テーマを、「役にたったかどうか」という視点から探る——というまさにメディア(ジャーナリズム)専攻の学生に期待される論文である。</p> <p>自らテーマを設定し、データを収集・分析、そして独自に考察し、論点をまとめる、という一連の作業をほとんど独力でこなしたことも高く評価したい。</p> <p>内容も、実際の新聞報道の分析はやや平板ではあったが、報道の問題点が十分批判的に検討されている。厚生労働省や自治体の動き、そして副作用が出た患者らの動きにも目配りがきき、考察にも「穴」がない。</p> <p>日本語は十分こなれており、誤字脱字もほとんどなかった。</p>	